

埼玉県男女共同参画推進センター (With You さいたま) 主催
男女共同参画基礎講座「アカデミズムの扉を開く —2013—」

日系アメリカ人作家 Wakako Yamauchi “The Handkerchief” に見る母親の逸脱と家族関係

中島 彩花 (立教大学文学部文学科英米文学専修) *

はじめに

1869年、会津若松藩一行がカルフォルニア州に入植したのを筆頭に、アメリカ本土への日本人移民の歴史が始まった。1890年頃の移民の多くは私費留学生であったが、1900年代になると移民の数は急増し、その多くは労働者としてアメリカの地を踏んだ。日本人移民のほとんどが故郷に錦を飾ることを目標に渡米したが、厳しい生活状況のもと、帰国することは困難であった。そのため、日本人移民の多くはアメリカに定住する道を選ぶことになる。これが日系一世の誕生である。アメリカ人女性との結婚が禁止されていた彼らは、日本から写真花嫁⁽¹⁾を呼び寄せ家族を形成し、日系コミュニティを築いていった。このようにして日系二世、日系三世が誕生し、日系アメリカ人の歴史が作り上げられたのである (桧原 31-35)。

1924年、Wakako Yamauchi は日系二世として生を受け、カルフォルニア南部の日系人コミュニティに居住し、日本の伝統や価値観を重んじる家庭に育った。太平洋戦争が始まると、Yamauchi はアリゾナ州のポストン収容所に送られた。そこで彼女は、既に作家として活躍していた Hisaye Yamamoto⁽²⁾と出会い、執筆活動を始めるうえで大きな影響を受ける。結婚後は主婦として執筆から遠のいていたが、娘が誕生したことをきっかけに、主婦業をこなしながら執筆活動をも行う “kitchen writer” として活躍する。1974年には、アジア系アメリカ文学選集として編纂された *Aiiieeee!*⁽³⁾に作品が収録されたことで、Yamauchi は作家として注目を集めることになる。また、その翌年に離婚したことで、本格的に執筆活動に打ち込むようになる。彼女は、短編小説を中心に執筆する傍ら戯曲も手掛けており、劇作家としても活躍した⁽⁴⁾ (“Introduction” 3-6)。

アメリカで生まれアメリカで育ち、日系コミュニティで暮らした日系二世の文学の特徴として、「アメリカ社会に日本人の顔を持ち、日本文化の影響を受けて生きることで生ずるアイデンティティの危機を描くこと」(植木 xviii) が考えられる。そしてその問題が、一世代との関わりや歴史との関わりの中で明らかになる。また、二世作家たちが強制収容を経験したことは特筆すべき事実であり、「各地に分散していた文学愛好家を一か所に結集させることになり、そこに自ずと新しい創作グループが結成された」(植木 xvii) 点において、二世文学の発展に大きな影響を与えたと考えられる。Yamauchi もまた、収容所において文学の道を志した者の一人であり、そこで経験した苦難が、二世作家のアイデンティティとして彼らの作品を構築する重要な要素になると考える。

Wakako Yamauchi の短編が収録された *Songs My Mother Taught Me* は、“Country Stories”、“City Stories”、“Recollections”に分類された 16 作品、そして戯曲の 2 作品で構成されている。*Songs My Mother Taught Me* 所収の “Introduction” より、Garrett Hongo は Yamauchi の作風について以下のように述べている。

There is a grand poignancy to all of this telling that Yamauchi, as a literary stylist, manages to fix in the mind with two literary techniques perhaps most familiar to poets: (1) She gathers up images from the landscape and from common life and weds them to narrative events; and (2) she ties new emotions, just emerging in the lives of her people and described in her fiction, to recognizable emotions already established in a tradition. (“Introduction” 8-9)

彼女は詩での表現技法を用いることで、風景や日常生活からイメージを広げ作品と結びつける。それにより Yamauchi は、情景や登場人物の感情の鮮明な描写を成功させていると考える。また、“And the Soul Shall Dance”、“Songs My Mother Taught Me”、“Otoko”に見られるように作品中に日本語の歌を導入することで、英語では困難とされる哀愁の表現を可能にする。そして、新しい感情（二世の感情）と伝統的な感情（一世の感情）を結びつけることにより、二世代間の相互理解の難しさを浮き彫りにすると同時に、それぞれの苦悩や欲望を明らかにすると考える。

Yamauchi の作品は、家族生活の中で満たされない思いを抱える一世女性が、抑制的な人生と対峙しようとしながらも、願い叶わず日常生活に埋没してしまう姿が描かれているとされる（植木 136）。本稿では、彼女たちの行動を社会規範からの逸脱と考え、逸脱に至るまでの経緯を明らかにすると共に、彼女たちを取り巻く周囲の反応を分析する。考察の方法としては、*Songs My Mother Taught Me* より短編、“The Handkerchief”を取り上げる。そして、女性が家族からの逸脱を試みる方法、目的、そして逸脱を認める存在といった複合的な視点からの分析を通して、Yamauchi の提示する逸脱の概念を明らかにすることを目的とする。

第1章 日本社会に見る家族による抑制

Wakako Yamauchi の作品における家族、特に夫や息子の存在は、女性を母親という概念に閉じ込める働きを担う傾向にある。そして、彼女たちが母親の役割から逸脱することに対し嫌悪感を抱き、阻止しようとするのもまた家族である。このような母と家族の関係が成り立つ要因の一つとして、家父長制を挙げることができるだろう。

Yamauchi が幼少期を過ごした 1930 年代の家族制度は「家長、その妻、息子、その妻、未婚の子ども、孫をはじめ、場合によっては家長の兄弟や血のつながりのない者まで含めた大家族制度である。父系がとられ、長男が家督および財産を相続する長子相続の原則に従って」（Nakano 17）おり、彼女の作品にも少なからず影響を与えていると考えられる。また、女性たちは家事や育児のかたわら、夫の仕事を手伝い懸命に働くにもかかわらず、「最終決定権を持っているのは男性で、妻に何の相談もせず重要な決断を下す」（Nakano 20）ように家族の中での地位は低く、選択の自由を与えられることはなかった。このように、男性優位の家族制度が、女性を母親としての役割に抑制していることが分かる。

社会規範からの脱却に対する嫌悪も、女性の逸脱を阻止する要因として考えられるだろう。日系アメリカ人は、アメリカでの生活において常にマイノリティであることへの苦悩を抱えていた。その傾向はとりわけ日系一世に著しく、外国人土地法⁽⁵⁾や排日移民法⁽⁶⁾の制定により、社会から疎外される状況に苦しめられていた。日系一世の多くは日本人コミュニティに居住し、その中でのみマイノリティとしての疎外感から解放されるのである。ここで注目すべき点は、日本人コミュニティ

内の封建的な村制度である。村制度は、アメリカ社会で差別を受ける日系人に社会的アイデンティティを与える働きをすると同時に、「コミュニティの公益のために個人の逸脱行為を規制する」(キム 162) 要因となった。加えて『家』中心の考え方(Nakano 20)が根強く残るコミュニティ社会において、親類が社会から逸脱した行為をすることで、自らも疎外される可能性に怯えていたと推測できる。このような観念が、母親という社会的規範から逸脱する女性を抑制することに繋がると考えられる。

第 2 章 家族からの逸脱を試みる母親の真意

Yamauchi は、母親の役割を逸脱する女性を「忘却」という手段を用いて肯定する家族の姿を描いている。女性に対し母親の役割を強要する存在である家族が、母を忘却することで逸脱を肯定する点において、彼女の作品に斬新さを見出すことができるであろう。本章では、このような Yamauchi の見解が最も顕著に表れる作品“The Handkerchief”を中心に考察し、家族が忘却という方法で、逸脱する母を肯定する存在となる過程を明らかにすることを目的とする。

分析を行う前に、本章で扱う「忘却」の定義について明確にする。“The Handkerchief”での忘却の担い手は母であり、彼女は家族からの逸脱を目的に忘却を促す。Benjamin に託したハンカチを媒介に、残された家族は母から提示された忘却を受け入れる形で、逸脱する母を肯定する存在となる。一般的に「忘却」は否定的な意味合いを持つが、本章での定義においては、母が抑制的な人生からの逸脱を完成する手段として、前向きな局面をも有していると考えられる。

“The Handkerchief”は、二世の息子 Benjamin の語りにより物語が展開する構成となっている。仲睦まじく Benjamin の誕生日を祝う Tanaka 家であったが、その夜、母が彼女の姉を看病するため家を空けたいと告白することで状況が一変する。父は強く反対するが、母は Benjamin に白いハンカチを託し、家を出ることになる。約束の期限が過ぎても母は帰らず、姉の病状が優れないため帰宅することができない旨が記された手紙が届く。ところが、次に届いた手紙に姉の病状に関する記述はなく、代わりに妻を亡くした男性のレストランを手伝っているとの報告がされる。家族が母のいない生活に適応していく中で、Benjamin は母の存在に固執し続けるが、最終的に白いハンカチを手放すことで新しい家族の形を受け入れることになるのである。

逸脱する母を肯定する家族について論じる前に、母が社会規範を逸脱するに至る経緯を考察していきたい。まず、彼女が母という役割から逸脱するきっかけについて分析する。ここで注目したいのが、母が家を空ける理由である。“Don't you understand? It isn't my choice. My sister is ill. Be reasonable; it's only for a month” (“Handkerchief” 122) とあるように、母は姉の看病のためであると主張するが、次の言及から彼女の本意を推察することができる。“It's always like this. I've devoted eighteen years to you—without complaint, without demands. I'm not made of stone. I have feeling too” (“Handkerchief” 123)。ここから、家父長制に苦しめられてきた彼女の悲痛な叫びが感じられる。また、母が自分を束縛するものから自由になりたいと望む気持ちが推察できる。彼女が家を出た本当の理由が、母からの二通目の手紙で明らかになる。

She was now helping a friend in his restaurant, she said. Just helping out—sometimes in the kitchen, sometimes at the counter—helping and earning a little money besides. This man had been widowed recently, and without his wife he was unable to carry on the

business—just until he got competent help. (“Handkerchief” 125)

母は妻を亡くした男性のレストランを手伝っており、少しばかり給料を貰っていることが記されている。彼女は家庭から逸脱することで、社会的な仕事を得たのである。桧原美恵は“The Handkerchief”における母の姿に対し、女性が夫以外の男性と共に生活することは「妻の在り方を規定する社会規範を超える」行動であり、一人の女性として「みずからのセクシュアリティの在り方を求めた」結果であると述べている (252)。しかし本稿では、このような母の行動をセクシュアリティの観点ではなく、社会的地位を得るための家族制度からの逸脱として解釈したい。この見解の根拠として、次の二点を提示することができる。

一点目は、母が姉の看病を理由に向かった土地、サンフランシスコである。サンフランシスコは、1851年に起こったゴールドラッシュにより、世界中から多くの人々が富を求めて集まった。そして、ゴールドラッシュがきっかけで成功した企業家たちが様々な事業を展開し、サンフランシスコの街は発展するのである (井上 351-352)。このように、全ての人に均等に機会が与えられ、個人の努力次第で社会的に成功することができる、いわゆるアメリカンドリームを実現することができる土地の表象として、サンフランシスコが用いられていると考える。以上の点から、母は、自らの力で社会的地位を得るという希望を実現するため、サンフランシスコへ向かったと解釈することができる。

二点目は、母から届いた二通目の手紙の内容にある。彼女は友人の男性のレストランを手伝うことで、少額ではあるが収入を得ている。桧原が述べているように、その男性との関係がセクシュアリティの解放を目的とするものであれば、母が男性の元で金銭に関わる労働に携わることに、違和感を抱かざるを得ない。二人の間に雇い雇われる関係が成立している点、そして母がその事実を表明している点から考慮すると、彼女の行動が社会的地位を得るための逸脱であると解釈することができるだろう。彼女は家庭で母親として役割を担うのではなく、仕事を得ることで自立した生き方を選択するのである。このようにして、彼女の行動が母という枠組みからの逸脱と見なされると考える。

第3章 母親を忘却する娘と父

娘と父の姿に焦点を当て、彼らが逸脱する母を肯定する要因を明らかにする。母が家を出てからは、母の代わりに長女の Mary が家事を行うようになる。“She took her job seriously and the house was never cleaner, never neater; meals, such as they were, were served at 5:30, never a minute later” (“Handkerchief” 123) から分かるように、Mary は家事を完璧にこなすことで、家族内で母の忘却を促す働きをすると同時に、逸脱する母の存在を肯定する存在として描かれていると考える。

ちなみに Yamauchi は、この設定と同様、母としての役割を担う娘が登場する例として“So What; Who Cares?” という作品も書いている。この作品では、年老いた母を介護し、母の人生を自分の理想へ近づけようとする娘の姿を通し、母子関係の逆転が描かれている。“It got so you couldn’t tell who was the mother and who was the child.” (“So What” 234) と母が言及する点から、母親自身もその事実を認めていることが分かる。ここから、母が永久に母親としての役割を全うすることは困難であり、娘がその役割を担う可能性が示唆されると考える。“The Handkerchief”においても同様の観念が働き、Mary は母の役割を担うことで、社会規範から逸脱した母を肯定する存在へな

り得たのであろう。

父に至っては、“Papa himself didn’t hurt. Even with Mama gone, his routine did not change” (“Handkerchief” 124) とあるように、母が家を空けることに強く反対していたにもかかわらず、彼女が居なくなったことを気にも留めない態度を示す。先述したように、家父長制の下で父親は、女性を母親という概念に抑制する働きを担う。しかしそれは同時に、母親の存在を否認する可能性をも秘めていると推察する。家父長制において、父は一家を取り仕切る存在として君臨する。しかし、家事や子育てを通し、家庭における母の重要性は無視できない。母親不在の家族が、通常通りの家庭生活を送ることの困難さは容易に想像できるが、父は、母が家庭内において自分以上に重要な存在であると認めることを拒むのである。それゆえ母を忘却することで、自らの家庭内での立場を確立しようとすると考えられる。このような見解から、Benjamin の父は母という概念を作り上げたにもかかわらず、母の重要性を忘却することによって逸脱する母を肯定する結果に至ったと考えることができるのである。

第 4 章 母親を忘却する息子

ハンカチの変化に焦点を当て、家族、特に Benjamin が母の存在を忘却し、逸脱した母を否認する過程について考察する。母が別れ際に Benjamin に託すハンカチは、“Though he didn’t use it, he could smell the bleach and soap so characteristic of her” (“Handkerchief” 123) と表されるように、母不在の家族内で唯一母を表象する存在としての役割を果たす。ハンカチの色に白が用いられることは、家庭内における全てを受け入れる、受動的な母の存在を暗示していると考えられる。それと同時に、“bleach” という記述は、母が自分の表象であるハンカチをあらかじめ漂白し、自らの家族における存在の痕跡を消し去ろうとしていたということを明かにしている。このような母の行為を、Traise Yamamoto は以下のように分析する。

It is here that the mother’s process of “effacement” begins: she makes her difference, as much as possible, by muting its visible and verbal features....However, there are also indications that the mother’s retreat to silence and invisibility are not only passive adaptations but also strategies of defense and resistance (Yamamoto 162)

“effacement” は、母が白人社会において差別に耐えるために身に付けた知恵である。しかし、この行為は受動的な順応であるだけでなく、自らを防御し社会に抵抗するための戦略でもあった。この作品中における母も、家族から自分の存在の忘却を促すことで、女性が自由に生きることが困難である社会に、抵抗の意を示していると考えられる。

家族が母不在の生活に適応していく中、Benjamin は辛いことがあるとハンカチの匂いを嗅ぎ、母を思い出す。その様子が次のように描写される。

The handkerchief was in his pocket. Benji put it to his nose—bleach and soap. The smell evoked a memory of a scant few weeks ago when order and mercy prevailed—the smell of an orderly house, the father, mother, members of the family in their proper places, chain of command undisturbed. (“Handkerchief” 125)

彼は、母を表象するハンカチの匂いを嗅ぐことで、家庭内で薄れつつある母の存在を確認する。そして、家族が揃って暮らしていた時の記憶を思い起こすのであった。ハンカチの匂いが変わらずにあることで Benjamin は母を忘れずにいることができ、それは同時に母の存在を認めることに繋がると考える。しかし、母から予定通り帰宅できないことを告げる手紙が送られた後、ハンカチに変化が起こる。

He closed the door carefully and got out the handkerchief. He put it to his nose. The smell was not quite the same. “How come? How come?” he asked. He did not cry. (“Handkerchief” 125)

ここでは、ハンカチの匂いに変化し、Benjamin が動揺している様子が描かれる。また、母がある男性のレストランを手伝っているとの報告がされると、ハンカチはさらに変化する。

He put it to his mouth, ready to bite the deceitful cloth, but the smell stopped him. It was sour. Was it from his sweating palms or his tear or did the handkerchief changed? He threw it on the floor and stamped on it. “Damn you,” he said. (“Handkerchief” 125)

ハンカチの匂いに変化し、Benjamin はひどく憤慨する。母を表象するハンカチの匂いに変化することで、彼は母を思い出すことが困難になるのである。また Benjamin の言動から、母を忘却することへの強い抵抗が感じられる。しかし、“Was it from his sweating palms or his tear or did the handkerchief changed?” (“Handkerchief” 125) との記述から、ハンカチの匂いを変化させる原因が Benjamin の汗や涙であると解釈することができる。すると、忘却は母によって促されると同時に、Benjamin 本人が作り上げる要素でもあると推察できる。これは究極的に、Benjamin が母から自立していく結末を暗示していると思われる。それから数日経つと、父や Mary の様子にも新たな変化が見られる。

For a few days Papa appeared grim and talked even less, but that passed, and maybe became because the night were so warm, his bedroom door now remained open. He seemed more friendly. He made half-jokes now and then, and the children responded quickly to show their appreciation. Mary changed too. The house was less tidy, the food more varied, the bread fresher. She was kinder. (“Handkerchief” 125-126)

これまで厳格で物静かであった父が親しみやすくなり、家事を完璧にこなすため弟たちを厳しく指導してきた Mary は、より優しくなる。このような二人の変化から連想するのは、本来母親に求められる姿である。今まで母が担っていた役割を父と Mary が請け負うことで、男性や娘が母親の代わりを務めることの可能性を示唆すると同時に、母性の曖昧さを浮き彫りにしていると考えられる。母性を担う主体は母親でなければならないという既成概念を覆し、父や娘にその可能性を見出すことで、母の存在の忘却を促しているように感じられる。また、ハンカチの描写からも、父と Mary が母の代わりを担う様子が暗示される。

He saw the handkerchief between Papa's good shirt and Mary's scarf. It was pink and stiff, as though it had taken the colors of Mary's scarf and fallen into the starch with Papa's shirts. ("Handkerchief" 126)

ハンカチは、洗濯されることで母の表象であった匂いを完全に失う。また、父のシャツの糊で硬くなり、Mary のスカーフでピンク色に染まったハンカチは、二人の存在に取って代わられる母の姿を象徴していると考えられる。そして、母からの最後の手紙は、内容を明かされることなく父によって燃やされてしまう。その時の様子を Benjamin は、“Everything was the same—the grass, the shrubs, the fence, the lilies of the Nile, the clothesline with the morning's wash” (“Handkerchief” 126) と述べている。母が居なくなるという大きな変化が起きているにもかかわらず、普段と変わらない様子から、母の存在を忘却し、新しい生活に適応し始める家族の姿が読み取れる。母の帰宅を心待ちにしていた Benjamin ですら、母の表象であるハンカチを手放すことを選択するのである。

Benji removed the handkerchief from the line and looked at it. He walked to the fence and dropped it on the other side. A freak wind blew in from nowhere and carried the handkerchief off, past the next lot and into the distance, and the same wind scattered the ashes of the letter. ("Handkerchief" 126)

Benjamin は自らハンカチを捨て、ハンカチは灰になった手紙とともに風に飛ばされていく。最後まで母の存在に固執し続けていた Benjamin にハンカチを手放されたことにより、母は家族から完全に忘却されることとなるのである。さらに、Benjamin による母の忘却は息子の成長を暗示しており、母を必要とする息子でさえも、父と同様に女性を抑制し軽視する存在になる可能性を提示していると考えられる。

おわりに

このように、家族は母の存在を忘却することにより、社会規範から逸脱した母親自身を肯定する結果に至ると解釈することができる。しかし、より重要なのは、まったく同時に忘却という一見否定的な要素を用い、抑制された人生からの逸脱を成し遂げる女性像を描いている点の方であろう。加えて、家族から忘却される母を描くことで、社会から与えられた家族という関係の曖昧性もが明らかになっていると思われる。こうしたことから“The Handkerchief”では、父、娘、そして息子に脅かされる母親としての立場を浮き彫りにするとともに、家族に忘却されながらも逸脱を成し遂げる女性を描くことで、逸脱に対する Yamauchi の肯定的な見解が明らかになると考える。

※肩書は発表当時のものです。

[注]

① 写真花嫁とは、二〇世紀初頭、先に渡米していた日本人男性と日本にいる女性が太平洋を隔てて写真や手紙を交換することによって成立した婚姻による花嫁である。彼女たちは「会ったこともない相手と

結婚する」という事実だけでなく、非文明的な国から来た花嫁への偏見が原因で、アメリカ社会から好奇の目で見られた。しかし、近代化を進めるため国民全体の質を高めることを目指し、国家組織の最末端に「家」制度を確立することを目的とした見合い結婚が一般化していた日本において、写真結婚に対する抵抗は少なかったようだ。むしろ当時の日本の庶民にとっては近代化された結婚と考えられていた（島田 49-50）。

② Hisaye Yamamoto は、1921年カルフォルニア州リンド・ビーチに生まれる。彼女は、14歳頃から『加州毎日新聞』の英文欄に投稿を始め、18歳頃には定期コラムニストとして活躍する。太平洋戦争中、アリゾナ州のポストン収容所にて、収容所の機関紙『ポストン・クロニクル』のリポーターとなり、この間に Wakako Yamauchi との友情を培う。また、主婦業に励むかわら執筆活動を行う“kitchen writer”の先駆者と言われる。代表作として、“Seventeen Syllables”(1949)、“The Brown House”(1951)、“Yoneko’s Earthquake”(1951)が挙げられる（植木 42-43）。

③ 1974年、アジア系アメリカ文学の記念碑的アンソロジーとして、アジア系アメリカ人運動の中で誕生した。文化ナショナリズムとも呼ぶべき包括的民族意識を打ち出し、共通のアジア系アメリカ人という意識を初めて内外に誇示する役割を担う。編者は、フランクリン・チン、ローソン・イナダ等、四人の中国系・日系作家である（植木 399）。

④ 1974年、戯曲に書き換えられた“*And the Soul Shall Dance*”が上演されてから、Yamauchi は本格的に劇作家としての活動を始める。主な作品としては、短編作品“*In Heaven and Earth*”を戯曲に直した *The Music Lesson*、収容所での生活を描いた 12-1-A、二人の女性が織り成す情念と嫉妬の愛憎劇である *The Memento*、毛沢東の妻、紅青の生涯を描いた *The Chairman’s Wife* がある（桧原 135）。

⑤ 1913年、カルフォルニア州議会において、外国人土地法が制定された。これは、日系移民一世から土地所有権を奪い取ることを目的とするものであった（植木 35）。

⑥ 1924年、移民割当法、いわゆる排日移民法が制定された。これにより、1952年に移民國籍法が制定されるまで、日本からの移民が禁止されることになる（植木 35）。

[引用文献]

Yamamoto, Traise. *Masking Selves, Making Subjects: Japanese American Women, Identity, and the Body*. California: University of California Press, 1999.

Yamauchi, Wakako. *Songs My Mother Taught Me: Stories, Plays, and Memoir*. New York: The Feminist Press at The City University of New York, 1994.

Wong, Sau-ling Cynthia. *Reading Asian American Literature: From Necessity to Extravagance*. New Jersey: Princeton University Press, 1992.

井上謙治・藤井基清、住居広士訳『アメリカ地名辞典』、研究社出版株式会社、2001。

植木照代・ゲイル、K、佐藤、『日系アメリカ文学 三世代の軌跡を読む』、創元社、1997。

桧原美恵論、「母のつぶやき—ワカコ・ヤマウチの短編に見られるセクシュアリティを巡って—」、『アジア系アメリカ文学—記憶と創造—』、アジア系アメリカ文学研究会、大阪教育図書、2001、243-259頁。
キム、エレイン、植木照代・山本秀行・申幸月訳、『アジア系アメリカ文学 作品とその社会的枠組』、世界思想社、2002。

メイ・T・ナカノ、『日系アメリカ女性 三世代の100年』、サイマル出版会、1992。